

要 約

「五 音楽作品における意味」

渡辺裕「音楽における意図と意味」(1984)
(pp.101-106, 便宜的段落番号 35 - 43)

[便宜的段落 35 - 41] 音楽作品は、単一の意味を指示するか？ または、多様な意味を指示する可能性があるか？

01. 作品が提示される条件が同じでも、別種の意味を伝えうる可能性を考える上で、モンロー・C・ピアズリーの論文は示唆的だ。
02. ピアズリーは、論文「音楽の理解」(1981)を著した(注釈28, K. プライス編、論文集『音楽の批評』内に収録)。
03. ピアズリーはこの論文で、音楽が自己の所有する属性を指示するという特殊な指示作用が成立するための条件の解明を試みた。
04. ピアズリーは、悲しい旋律がその「悲しさ」を所有するだけでなく指示するとしたら、それはいかなる仕組みで可能かを考えた。
05. ピアズリーは、「対象展示」と「属性展示」の概念をつかい、前者が後者を支える関係がある時に指示作用が成立すると主張した。
06. 「属性展示は、属性展示している事物そのものが対象展示されたものである時、そしてその時にのみ指示であるか、又は指示を内含する」
07. 音楽作品はまさにそれ自体が対象展示されることで、自らの所有する属性を指示しうることになる。
08. ピアズリーの考えはグライスの共通性がある。
09. ピアズリーの〈二つの展示〉の区別は、グライスの〈二つの意図〉の区別とほぼ同じである。
10. ピアズリーの「対象展示」= グライスの「一般的意図」。 ピアズリーの「属性展示」= グライスの「個別的意図」。
11. 音楽作品において展示される属性は「演奏会(やレコード)において展示される」(p.104)という文脈で注目に値する属性に限られる。
12. たとえば、作品として展示される場合と、音楽理論の説明で展示される場合とは、注目に値する属性は異なり、指示内容も異なる。
13. そして、音楽の指示しうるのは、音楽が内部に所有する属性に関する事柄であり、音楽の外部の事柄を指示するという考えは否定される。
14. ピアズリーは、音楽作品として展示される場合の属性を「悲しさ」や「ためらい」のような性格に限定するが、それだけではないはずだ。
15. 「注目に値する属性」は、「作品を有機体として形成してゆく上でもっとも関与的な属性」と言いかえることができると、渡辺は考える。
16. そうであれば、「悲しさ」のような性格以外にも、他に多様に意味を指示しうる可能性がある。
17. 聴き手は、ある旋律が指示しうる複数の属性の中から、有機体的全体を最もよく説明できる属性が指示されていると捉えると渡辺は主張。
18. つまり、旋律には意味として指示しうる属性が、豊富に含まれており、可能性としては多様な意味を指示しうることを渡辺は主張する。

[便宜的段落 42 - 43] (論文全体のまとめ)

19. 我々は音楽の意味作用の成立を、それに必要なコミュニケーションの構造を明らかにすることで解明しようと試みてきた。
20. 結果、意味作用の可能性は、作曲家が有機体として作品を作り、作品として提示する形で完遂する〈コミュの意図〉であると結論した。
21. 作品が作品として展示され、人々がそれを作品と解釈することで、通常のコミュとは異なる、新しいコミュが成立する(c.f. 第3章)。
22. 受け手は「新しいコミュ」の中で、「通常のコミュ」とは異なった「意味」(※ = 「意味するということ」意味作用の仕組み)を了解する。

※「意味」(ここでの括弧付きの意味の語句) = 「意味するということ」、意味が発生する仕組み、“meaning”。

※ 意味 (括弧のついていない意味の語句) = 個別具体的な意味内容のこと

23. この「新しいコミュ」(= 芸術作品のコミュニケーション)は、音楽のみならず、芸術全般にあてはまることと、渡辺は考える。
24. もちろん、すべての音楽がこの「新しいコミュ」にあてはまるわけではないだろう。
25. しかし、「新しいコミュ」の構造が、我々の音楽聴取を何らかの形で規制しているはずと、渡辺は考える。
26. なので「新しいコミュ」の構造を明らかにすることは、我々が受容しうる音楽の豊かさや限界を教えてくれる上で利するものだと考えるものだ。

(以上)